

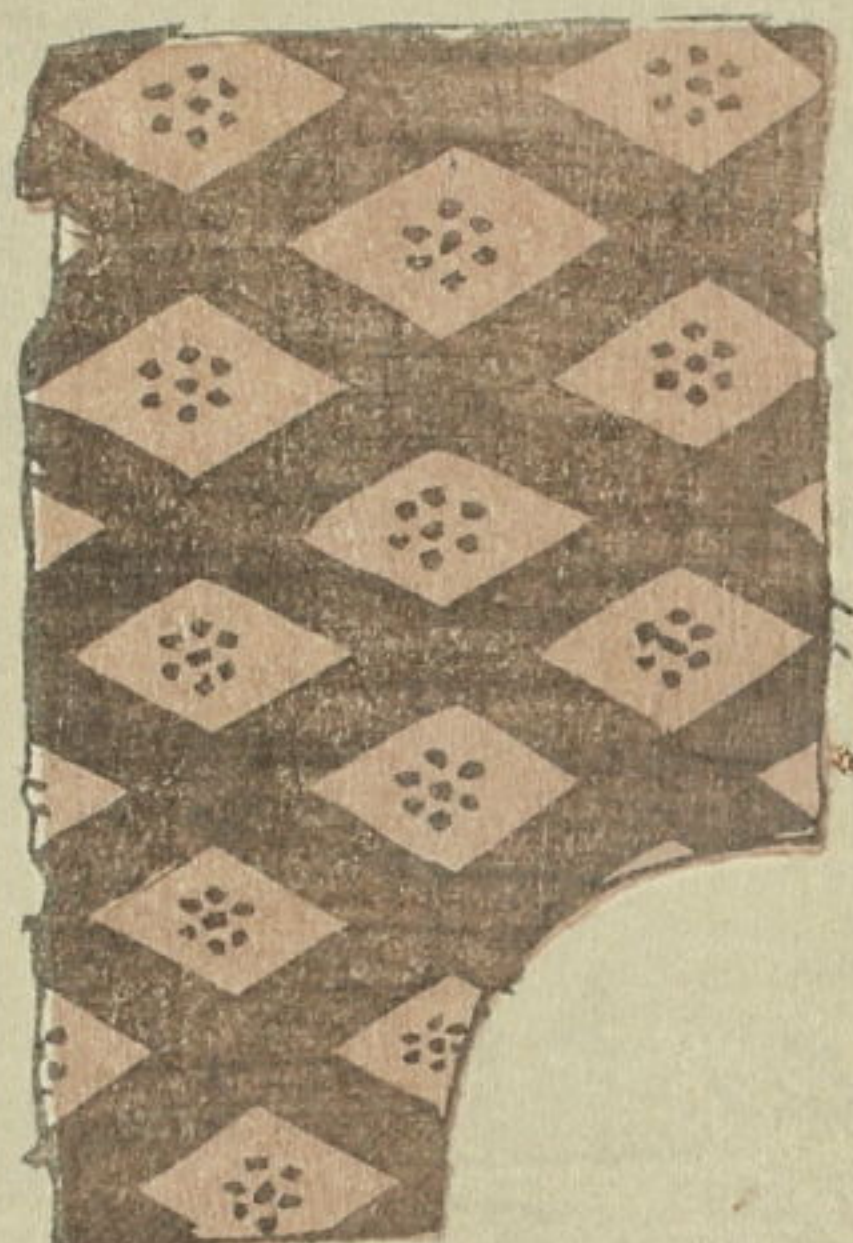
白縫譚
卅九編
種者化芳
葉畫持原

葉畫持原



葉畫持原

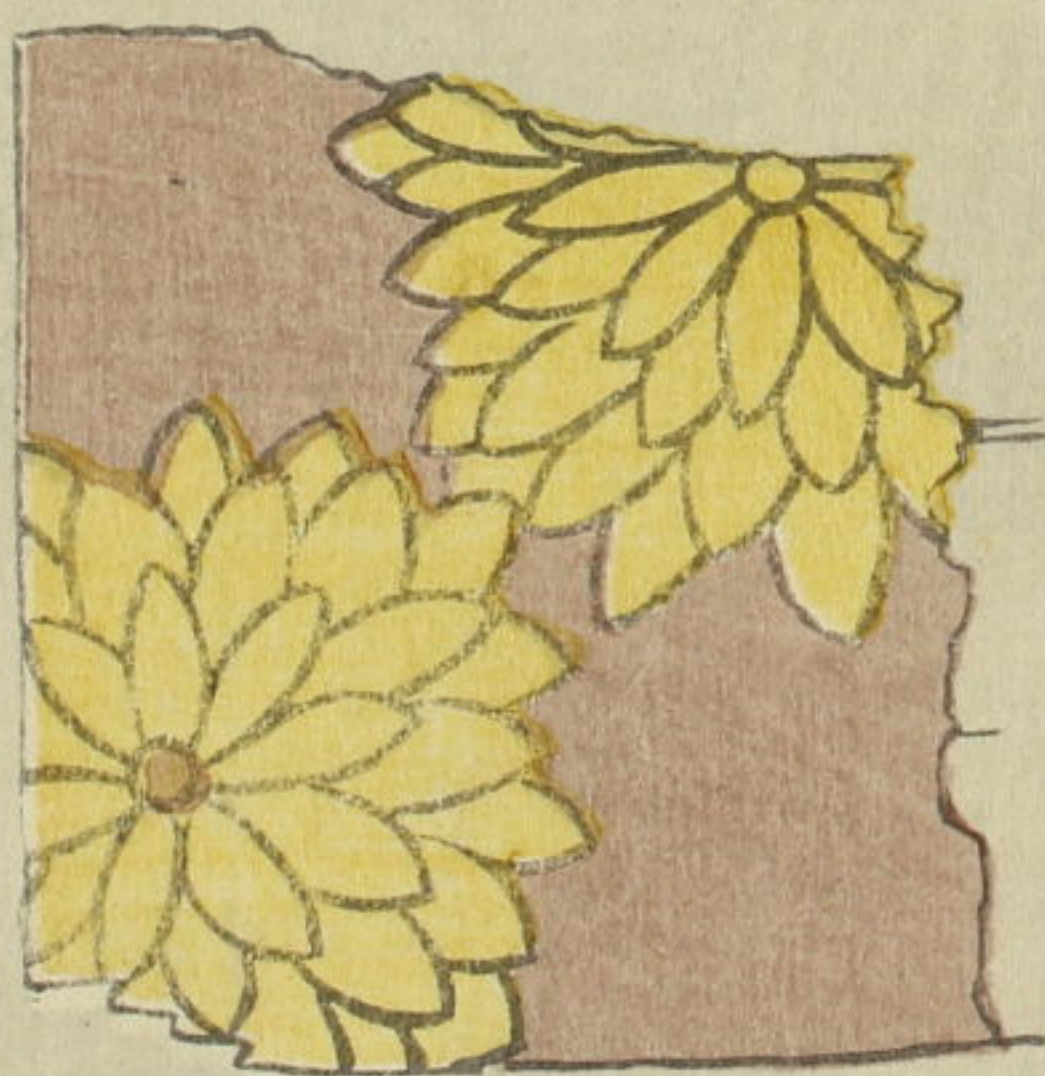




あねが

ゆきうら

三十九のこ



新多様衣

あきふゆの歳画

初めきり

癸亥

新鵲

廣幸梓



三十九編上

三十九編下

白縫

物

語

種彦作

芳幾畫

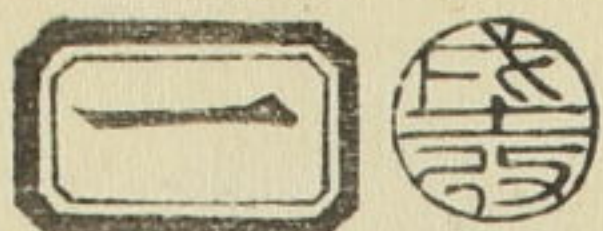


不知火物語

三十九編下



ふれもてはるる
よりあつる
廣きや板



草冊子の兒戯の書あり読めざるれば亦遠波や假字拾へざる可とい其
意解がじいともと地をわ(み)ど井処といと糸と混て霞ぞ柏味醬小あり平
假名計で書との却読む難義あり濁点ひらも大更あるを發兌急ぐ問屋
の定り此草紙も去年の冬より三帙の校合とが彫改めぬが況や序
文と口画との別物ゆゑをいふべし文字傍假字と筆耕の謬のま彫方
多に掛又小刀の先も大さき世話とはいふれど事ハ解れど前版の序文の
首小風土記とふらとと傍假字あるは屏風や風情の風を不思風といひの
正こそ草稿小市さあ白縫に不知火あれどぬいと唱のかひ熟まて
又書馴まひひるといとよむされば假名遣ひ正敷きく稱へ古來のす
成より湯桶訓でも訛語でも称改るの却てつゝあ故人の序文は稗史の
大人の覽め東西とありぬと云々如きは世界故株ふあつる魁本あれを
ごうでも可とあてあつと識者の誹謗と謝をんとて惡かれ口も老はくせ作
者の苦心をかくはふふとくも記をも又つはし

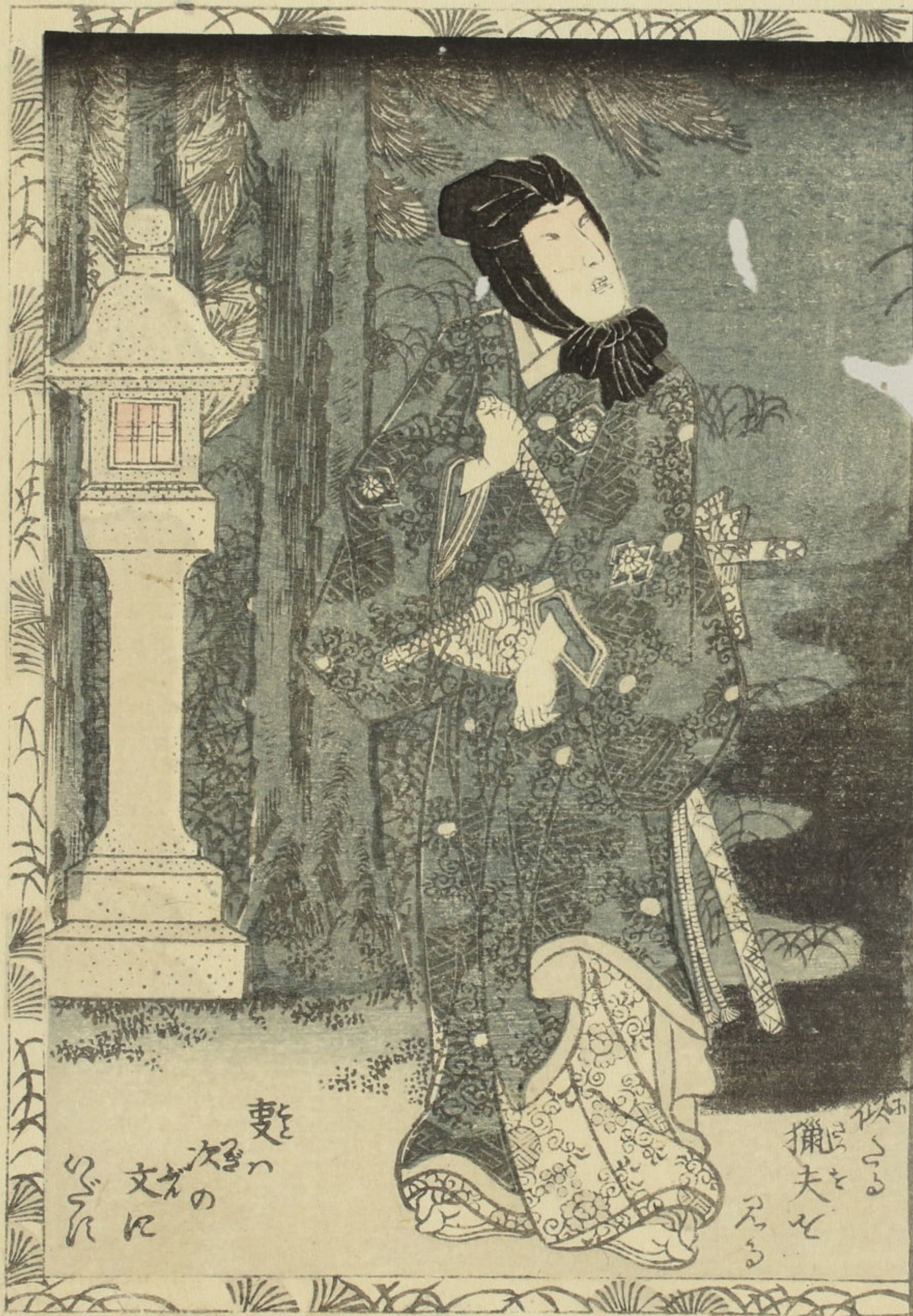
柳亭種彦



筑前國
嘉摩郡
山田河内
笠松の
下にて
御笠山
伊達五郎
暴雨を
冒し



五人の
克徒を
一刀小塵に
変へ
四十一編み
詳あり



妻の
次女の
文に
いふ

御
夫を
いふ



大隈
霧中に
代右衛門

麓の
尾鷲
早良
郡

青柳
春之助



卷之三

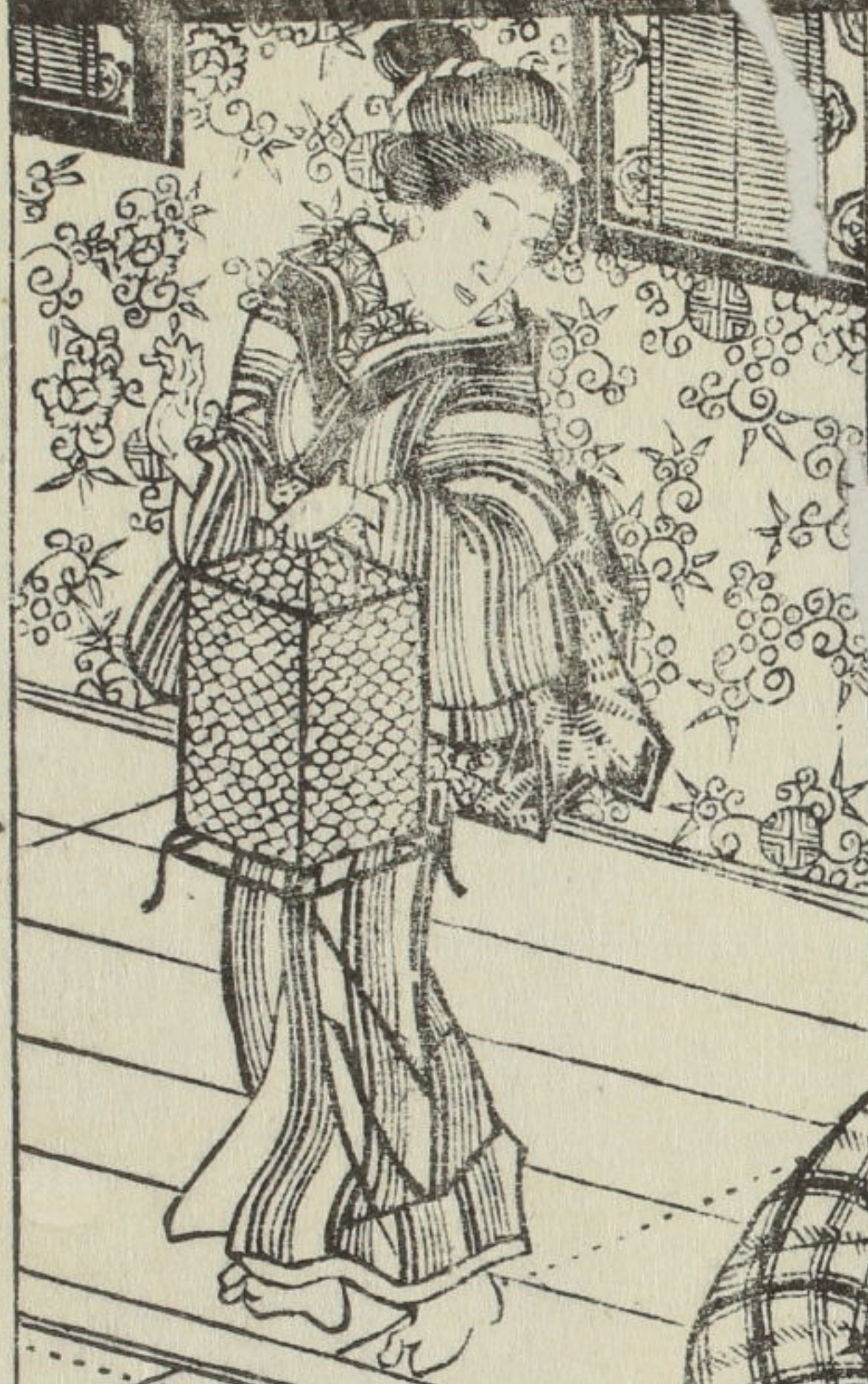


かたてふくしのふちをきり
 くりあはしのでこちと題を
 つくまはきりてふちをきり
 うつてふちをきりてふちを
 きりてふちをきりてふちを
 きりてふちをきりてふちを

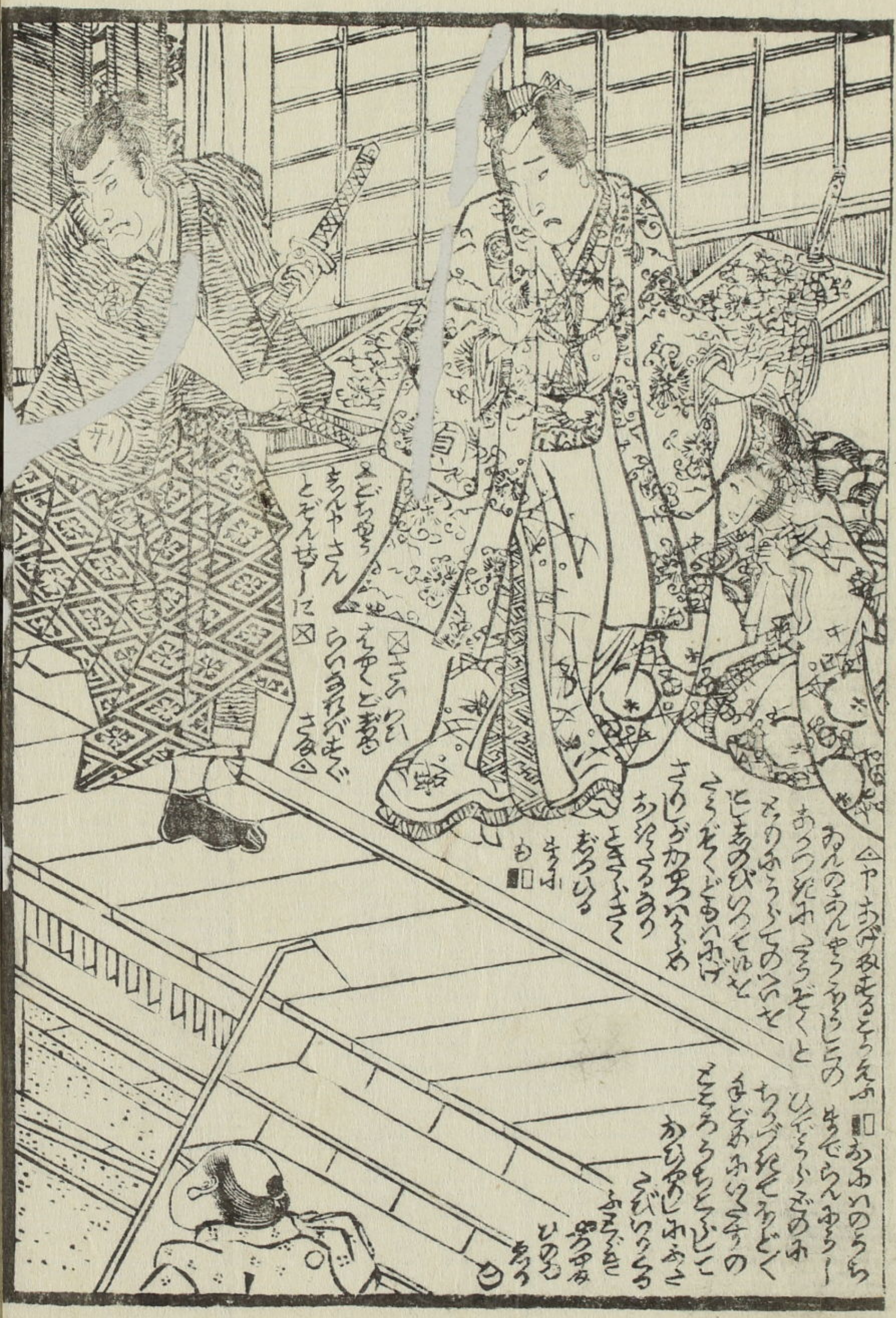
こち
 うり
 こち
 うり
 こち
 うり

[illegible]

つゞきあや
とてをせむせぬ
あふこのまにのけ
なぐたひうめづ
かになびて
四人あはる
てつちちち
けいけい
うけ



易のふかあつたにまゐるを
 まてはとこのまねがくれも
 けがかわきとくこれど
 まづめらふまのこの山まわ
 のよりゆくふのやめるこりゆ
 うちをさうこ
 め之をもえん
 かりあるの
 となりの
 かんどの
 あまきこ
 ひひとあそ
 ちよの
 あだのよ
 のまじう
 あめてひな
 うちから
 ねのとこの
 あまごひぎ
 あつぬぞれを
 をじとのあす
 まどうこひ死
 うほつ、うぶするさあめ
 らげありまろだすあ
 のうしろふのまのふ
 あうぬ名の木のあか
 ひそくこあだる
 あころせふ



あんめ
うけてのめ
るぐあふ
ぐめ
づで
上へ



わむ
あれ
とく
はを
きぬ
おひと
きけ
ふん

[illegible]

ぞくの名
 まぢぢぢ
 あめをこま
 やしむひの
 こま
 と

[illegible][illegible]

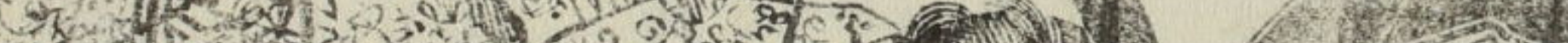
卷之三

[illegible]

あやまののせーにふは
 ゑがめつひとあすうあゆ
 なかあうあんてきのひ
 ちろたふじとれおき
 のくとくやうなるさまを
 まさけにめつる
 ところまちうちいへば
 おもやたまわきのよりのし
 ときびぎあらんとあけなます
 ううよりなきうへせーめん
 もらうともきをまねて
 ぶつとくまんまれどひあ
 まさうあうちだと
 あせるめいせい

[illegible]

く
いせく
くさく
のふちあう
なす
を吐
ちあう
に



のかく
 の日
 をて
 めく
 あつそ
 るる
 うろ
 な

[illegible]

二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一

△
△

卷之五

分世

三

下

五



Handwritten: *Handwritten*

卷之四

卷八

東



人
臣

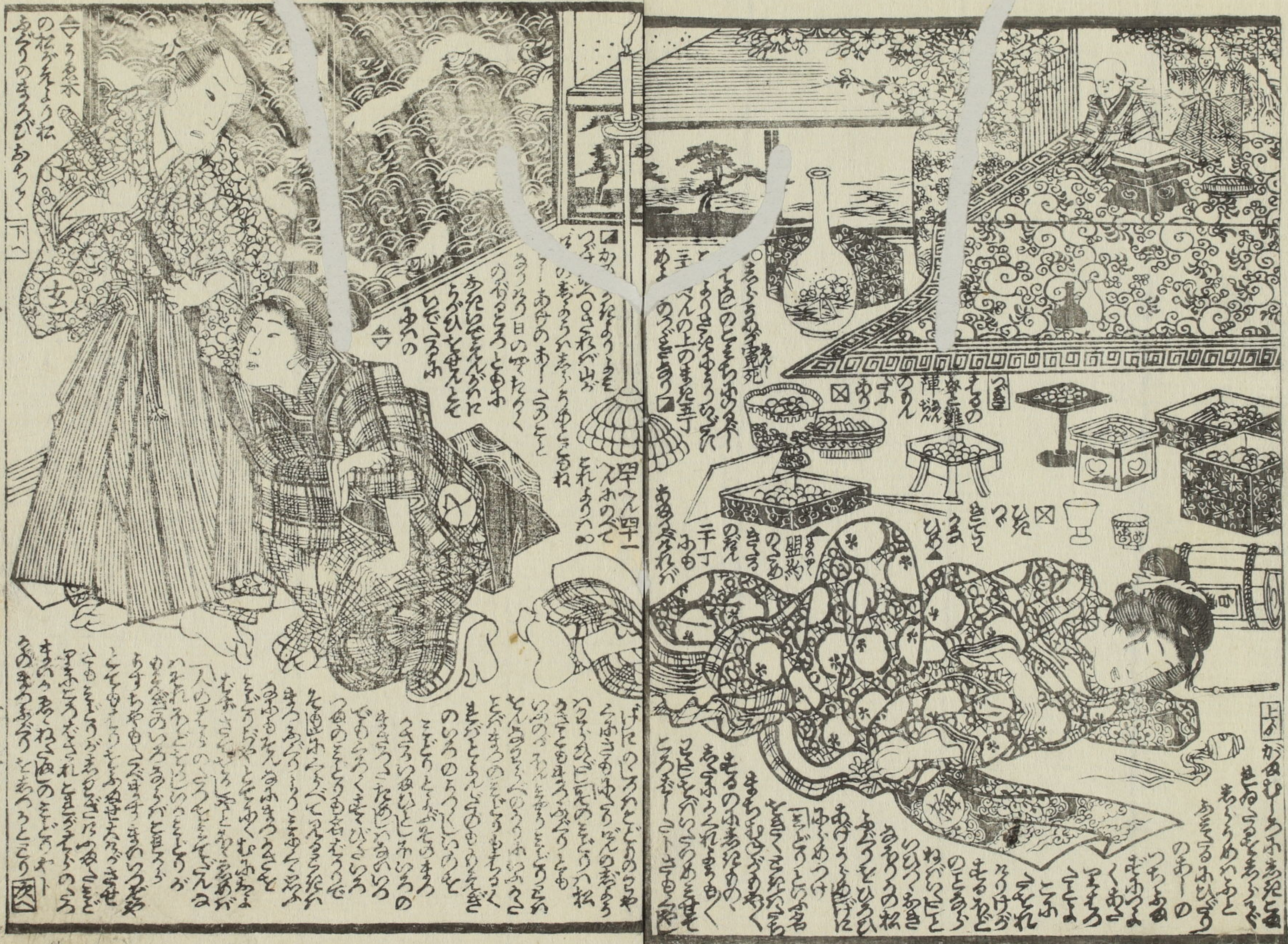
幾五

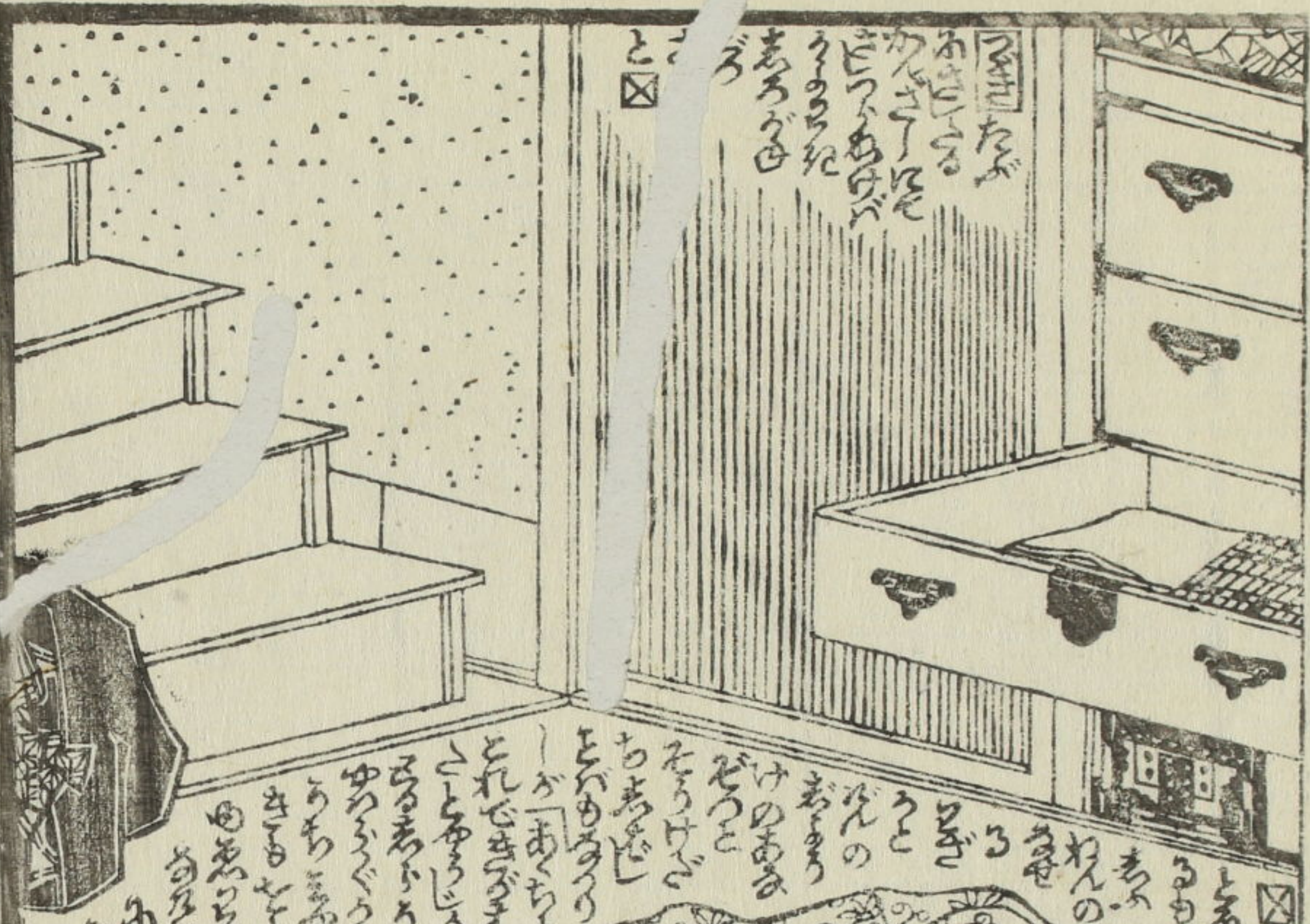
助



[illegible]

[illegible]

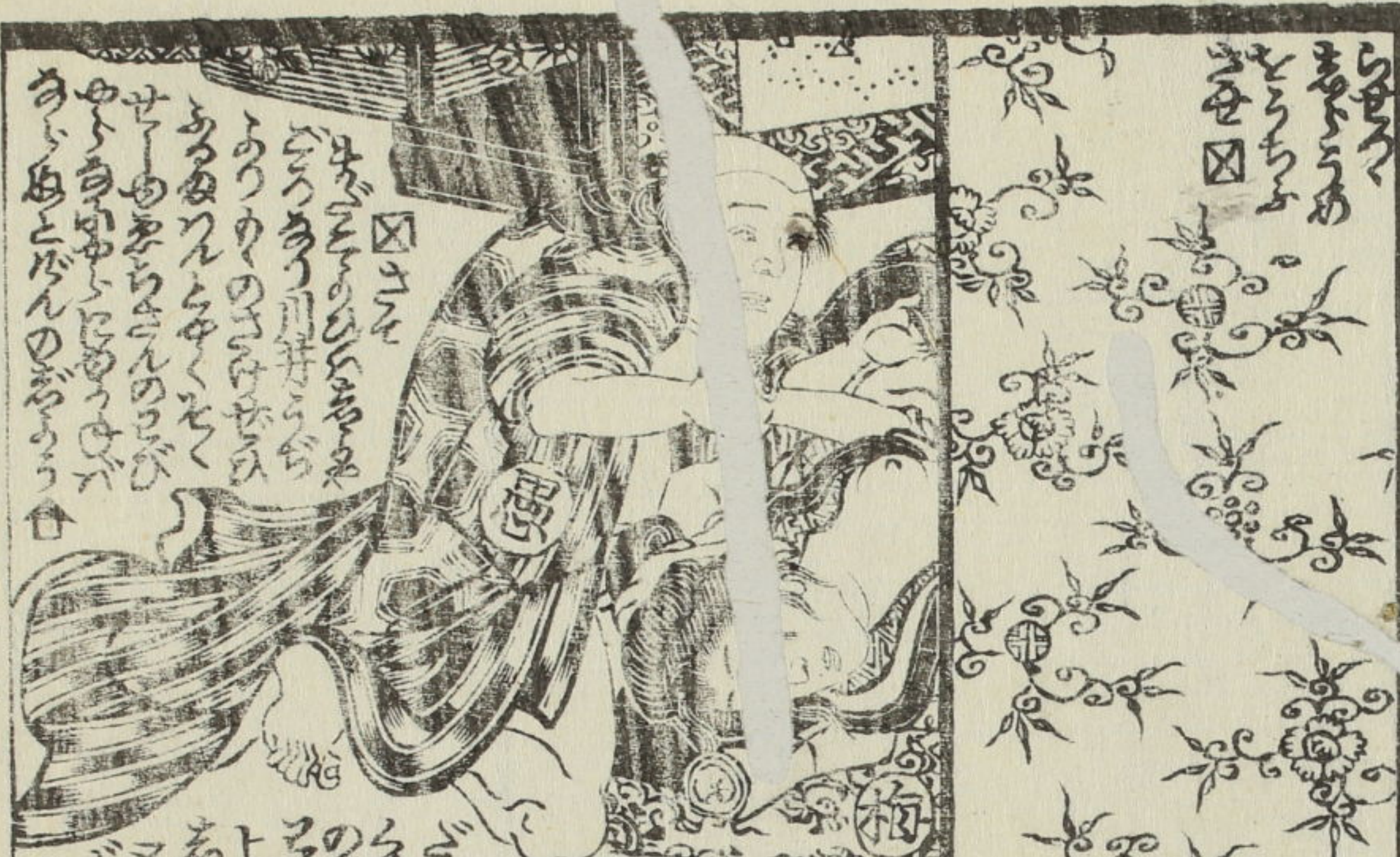


[illegible][illegible]

△あちく
まぐさく
のむろどあ
のちたごあ
もろくちりて
あーこあ
あえあきも
あぶらあ
あふあ
あふあ



らむ
まふ
とら
せ

[illegible]



あふらふ
はきあひの
あそびをう
あふさん
うへにうま
そうてうま
うまうま
のま

根岸交喪書

(一) ちりきんとつくと云(ハ)うねけも
あぐさちりきとてぞわ
はめせぬめのさあふるがむひ
うちをとりてあすうふいぬめ
五さうのじぶくひとの(ごも)
にわたりまうにもんやんあふ
柳がふよとあふ

ぬいぢち山かあらくひ
 りねやトつちあらぐそ
 おねんのぞん
 ちあらくひぬく
 りぢちぬきぬ
 ちをそじて
 のそぢちくさるへちよす
 ち入ち山ぢんぐのとちち
 つれぢちぬのぢちち
 ちぬぢちぬきち
 ちあらくひち山
 ぢちちちちと
 ちちちちち

種彦作芳幾畫

三十八編 阿修羅と米姫の戀さるゝ由非を改め終に命を損す此時花
輪軒より更手と名告り合悲喜交決を催す話あり花形の鏡の由
米姫公の死日菊地負行淫婦蘇子愚溺春之助新討煙演屋敷の秋
見小三十三編 春之助英浦と二日市湯治場の昔語安養法師
梅とくく問小苦む鳥山青柳黒白對決の半あり三十九編
負行闇思ひ豊後を追ふ折くら若菜姫傳多小来り負行の振
薄命の愁數場三笠山人蛇川再逢の取合三十九編
黒崎の城より毛刺と初めの出會花より勇ま趣を專し或ハ
白梅寛小隨くを果し又綾機父仇を復す幸此編載す今四十編
三笠山人鹿夫婦より大蛇川師弟を山田河内小殺す若菜姫九州小威を振へ
小至り龜谷多門鳥山秋作力松と再會し鳥山小向ふ四十編以下又記す今
枚元菊壽堂小代り枚者柳亭種彦述



